The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	前田和夫著『紫雲の人、渡辺海旭 壺中に月を求めて』
Author(s)	菊池, 結
Citation	宗教と社会貢献. 2012, 2(1), p. 87-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/15017
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

前田和夫著
『紫雲の人、渡辺海旭　壺中に月を求めて』
ポット出版、2011 年 6 月 22 日、四六判、528 頁、3,990 円

菊池　結*

1.　業績の遺産伝達と資料の欠損

著者である前田和夫氏は、翻訳家であり、ノンフィクション作家であり、編集者である。また、路上観察学会事務局も務める。近著に『民主党政権への伏流』（ポット出版、2010 年）がある。そして、渡辺海旭（わたなべ　かいぎょく、1872 - 1933）が 1911 年（明治 44）から校長として、死去までの 20 余年間勤めた芝中学と芝高等学校（海旭出身校）の 60 回生である。

芝中・高は東京都港区芝公園にあり、当初は浄土宗の宗門校として設立され、現在でも中・高一貫の名門校として知られている。校庭のすみには、今でも海旭の胸像が立っており、端正なまなざしで生徒たちを見守っている。

渡辺海旭といえば、東京市浅草区に生まれ浄土宗源覚寺住職・端山海定のもとで得度を受けた僧侶であり、梵文学者であり、「浄土宗労働共済会」を設立した仏教社会事業の第一人者であり、芝中学の校長をはじめとする教育者であり、同時にドイツ留学中には社会主義者やロシア革命家とも付き合い、晩年には頭山満や中村屋のボースなどとの付き合いが指摘される。それだけに、彼の業績の伝達は重要かつ困難である。

それは、海旭が多才な人物であるというだけではなく、近代仏教史や社会事業史・仏教福祉研究に重要な人物であるにもかかわらず、彼に関する資料が関東大震災と東京大空襲によって焼失したことに関係する。だが本書は、第一部青雲編、第二部雌伏編、第三部雄飛編、第四部回想編、の 4 部に分かれており、海旭の幼児期からドイツ留学以前まで、ドイツ留学時代、帰国後、海旭を中心とする人間関係、とそれぞれの年代・テーマごとに著者の大胆な推理と想像力で「事実」をつなぐことで執筆がなされている。著者は、そのような視座から海旭の生涯・思想・業績・人間関係をも自身が述べるように「小説風評伝」と「評伝風小説」のあわいにある「物

* 大正大学綜合佛教研究所研究生

語」として描き出している。これは従来の海旭の人物史が、資料の制約と一つの器にはおさまりきらない海旭の人物像が障害となり、時代ごとにあたかも違う思想を持つ人物（人間ならば当たり前ともいえるが）として書かれているのと好対照である。文章は、話し言葉調で書かれており、読者にとってぐっと身近でおもしろく読んでいただけるだろう。

2. 本書の内容

以下が本書の目次一覧である。ひと通り読んでいただければ、本書が誕生から死去まで網羅的に書かれていることがご理解いただけるだろう。

序
渡辺海旭の多様なる人脈
写真・留学時代の渡辺海旭
帰国してからの渡辺海旭
第一部　青雲編　一、明治天皇と蛇骨長屋と牛鍋屋　二、廃仏毀釈と金竜山浅草寺　三、東京府立庶民夜学校　四、抜擢　五、尋常小学校へ　六、博文館の小店員　七、渡辺海旭の誕生　八、八宗の泰斗、福田行誠　九、本誓寺寒林舎、法話と品定め　十、浄土宗学東京支校　十一、福田行誠、遷化す　十二、壺月と号す　十三、宗門を超えた新仏教運動
第二部　雌伏編　一、欧州航路船上の人となる　二、教育こそ国づくりの基　三、食と酒は欧州の十字路にあり　四、聖母マリアは観音菩薩？！　五、自由思想団で大いに弁ず　六、新旧異教間交流　七、日露戦争　八、惜別と盟約　九、シュヴァイツァーとの出会い　十、畏友、荻原雲来を故国に送る　十一、詩藻の力　十二、帰国
第三部　雄飛編　一、創作童話「釣龍爺」　二、社会事業家として　三、新戒律主義　四、遵法自治、芝中学三代校長　五、文案家として　六、国士として　七、関東大震災　八、仏教史の金字塔、大正新修大蔵経　九、国際梁山泊、西光寺　十、遷化
第四部　回想編　一、中村屋女主人、相馬黒光　二、カルピス創業者、三島海雲　三、浪漫詩人、土井晩翠　四、孤高の監督、今井正

五、敬虔なる愛弟子、磯村栄一　六、異色の外交官、寺崎太郎
七、異教のライバル、賀川豊彦　八、畏友の娘婿、井上靖
渡辺海旭略年譜
主要参考文献
初出一覧

第一部では、まず渡辺一家が蛇骨長屋で生活する場面から始まる。実は、海旭の幼児期はあまり分かってはいない。冒頭部分は、著者の創作であろう。現在最も詳しいものは、『武田泰淳伝』を書いた川西政明によるもので、海旭の事績を『壺月全集』（1933 年）所蔵の「略年譜」「伝記」と、芹川博通『渡辺海旭研究―その思想と行動』（1978 年）と大橋俊夫『浄土宗仏家人名事典　近代編』（1981 年）と、浄土宗務所保管の「僧籍簿」をもとに事績を記述している。しかし、まだまだ不明な点は多い。海旭の除籍謄本(1)は墨田区役所が 1945 年（昭和 20）の東京大空襲で全焼したため残っておらず、父啓蔵の謄本も昭和 32 年に、台東区役所が 1872 年（明治 5）から 1906 年（明治 39）までの除籍謄本を廃棄処分したため残されていないという。「一、明治天皇と蛇骨長屋と牛鍋屋」で牛肉うんぬんとあるのは、海旭が青物を食べず肉食を好んだことから物語として盛り込まれたものだろう。また、「五、尋常小学校へ」で会った大工は後に浄土宗労働共済会の節にも登場している。

第二部では、まず留学時代の出来事として、1900 年（明治 33）5 月 5 日ドイツ・ストラスブールへ向かう讃岐丸出航のかなり詳細な内容が紹介される。ついで帰国後に禁酒運動をはじめる海旭がかなりのビール党であったことや、当地で神父や神学者との付き合いが見られたこと、そして社会主義を中心とした「自由思想団」への入会、ドイツで迎えた日露戦争と彼の戦争観についても概述される。第三部では「雄飛編」として、帰国後から死去までが紹介される。注目すべき点は、創作童話「釣龍爺」への著者の解釈である。これは、帰国すぐ『新仏教』の企画として会員それぞれが童話を創作したというもので、「釣龍爺」は“金龍を釣るために財産も妻子も捨てた老爺が、とうとう龍を釣りあげたが、龍を操っているつもりで、自分が操られていたことに気づき、龍を淵に離して終わる”という話である。著者は、この金竜こそが、留学期間であり、宗門であり、新仏教徒同

志会ではないかと述べている。最後の第四部では、1951 年（昭和 26）2 月 25 日放送のＮＨＫラジオ「光を掲げた人々」という番組を、海旭に関係する人物が聞きながら回想するというかたちで紹介されている。

3. 「物語」と資料の制約、海旭像の多様性

“茫洋たる海旭の像に見取り図を定めたい”これが、著者の目的の一つであった。本書を読んで読者も感じられることだろうが、海旭はどういった人物なのか。「現代感化救済事業の五大方針」を発表、慈善を否定し社会事業を提唱した先駆的な社会事業家か、名門ストラスブール大学で博士号を取得し、全百巻からなる『大正新修大蔵経』を監修した古梵文の研究家か、伝統的な仏教界と対立すべく立ち上がった革新的な新仏教徒同志会の会員か、浄土宗執綱（現・宗務総長）を努めた僧侶か、生涯不犯の戒律僧か、行動派右翼の頭山満やインド独立運動の志士ラス・ビハリ・ボースらと付き合いのあったナショナリストか、多様な海旭像に読者は驚かされる。

本書はもちろん学術書ではないだろうが、これまでの所謂「渡辺海旭論」に関するめぼしいトピックが網羅的に取り上げられており、海旭に関する生涯や行動の規範を捉えるには便利な著書である。著者は、これまで資料の制約により分からなかった限界を超えて、「物語」にすることでより統一感と立体感を持った海旭の人物像を浮かび上がらせた。しかも、それは著者の幅広い見識と過去の研究資料によっている。けれど、知られた事実をベースに想像力によって過去の人物や社会を描く場合、事実の検証、欠落した事実について批判すべき点があるだろう。例えば、これまでの研究では分からなかった家族関係、新仏教徒同志会員での人間図（当初、会員唯一の伝統仏教僧侶であった）、労働共済会の運営や利用者の様子などにもっと迫ることはできなかったか。また、本書では海旭研究の第一人者である吉田久一や芹川等の先行研究を基礎としてさらに踏み込んだ新事実を盛り込み記述することはできなかったか。しかも、2005 年には『労働共済』が、2009 年には『新仏教』が復刻されている。また、ここ 10 年ほどで近代仏教、新仏教の研究は急激に進んでいる。昨 2011 年 10 月にも、国際日本文化研究センターでの国際研究集会「近代日本と仏教」が開催された。

4. 新しい展望と仏教社会福祉

ともあれ著者は“海旭が手がけた、宗教の再生、社会事業、教育などは解決ずみの「過去」ではなく、まさに我々が直面している「現在と未来」の課題であり、だからこそ我々の現在と未来のために、ぜひとも海旭の実像にせまること”を本書執筆の動機にあげている。現代では、浄土宗労働共済会設立時期と同様に、失業率は高い。2011・3・11 の震災後は衣食住の基本的な復興とともに就業率も同様に考慮する必要があるだろう。宗教学においても宗教と震災復興に力点をおいた研究が志向されているように見える。かつて海旭は、仏教徒社会事業研究会を開設し、労働共済会で実践するとともに、つまびらかに社会事業のフィールドで宗教的な世界観を開花させてくれたのである。本書は、資料の制約と多様な海旭像を「物語」として再構成し、楽しくかつ分かりやすく読者に提供している。

註

(1) 父啓蔵の商売が立ち行かなくなり、1881 年（明治 14）12 月 26 日抜嫡届を提出。このとき「満照（まんしょう）寺」に入寺したといわれている。

参考文献

川西政明 2005『武田泰淳伝』講談社。
壺月全集刊行会編 1933『壺月全集』上・下巻、大東出版社。